

注は、すべて不破がつけたもの。

私はブルジョア経済「*1」の体制をつぎの順序で考察する。資本、土地所有、賃労働、そして国家、外国貿易、世界市場「*2」。はじめの三項目では、私は近代ブルジョア社会が分かれている三大階級「*3」の経済的生活諸条件を研究する。その他の三つの項目のあいだの関連は一見して明らかである。資本を論じる第一巻の第一部は、次の諸章からなっている。(1)商品、(2)貨幣または単純流通、(3)資本一般。はじめの二つの章が本書の内容をなしている。すべての材料は個別論文のかたちで私の手もとにあるが、それらは、私みずからが問題を理解する目的で、かなり間隔をおいて時々書きとめられたものであって、印刷するために書いたものではない。そしてそれら諸論文を前述のプランに従って関連のあるものに仕上げることは、外部の諸事情によるであろう。

*1 資本主義経済のこと。マルクスは、この序文を書いた時点では、まだ「資本主義」という用語に到達していなかった。マルクス「資本主義」という用語を使うようになるのは、『資本論』に向かう次の草稿『六一〜六三年草稿』を準備する過程のなかでだった。

*2 経済学の著作のこの六項目のプランは、マルクスが、『資本論』に向かう最初の草稿である「五七〜五八年草稿」を執筆する際に立てたプラン。『資本論』に至る過程では、執筆プランは大きく変更されていった。

*3 三大階級とは、ブルジョアジー（資本家階級）、地主階級、労働者階級のこと。

ざっと書き終えてある一般的序説は、私はこれを差し控えることにする。というのは、よく考えてみると、これから証明していこうとする諸結果を、どんなかたちであれまえて示すことは、妨げになるように私には思われるからである。そしてまた、およそ私の叙述についてこようとす読者であるならば、個別的なものから一般的なものへとよじ登っていく覚悟をもたなければならぬからである。その代わりにここで、私自身の経済学研究の歩みについて若干の概略にふれておくことは許されるであろう。

私の専攻は法学であったが「*1」、しかしそれを私は、哲学と歴史を研究するかたわらに副次的な学科として学んだにすぎなかった。一八四二年から一八四三年にかけて、『ライン新聞』の編集者「*2」として、私ははじめて、いわゆる物質的な利害関係に口をはさまざるをえなくなり困惑におちいった。木材盗伐および土地所有の分割にかんするライン州議会の討議、当時のライン州知事フォン・シャーパー氏がモーゼル農民の状態について『ライン新聞』を相手にして起こした公けの論争、最後に自由貿易と保護関税とにかんする討論、これらのことが私が経済問題にたずさわる最初のきっかけとなった「*3」。他方

では、その当時は、「さらに前進しよう」という善良な意志が専門的知識よりもずっと重きをなしていた時代であって、フランスの社会主義および共産主義の淡い哲学色を帯びた反響が『ライン新聞』においても聞かれるようになっていた。私はこの未熟な思想にたいして反対を表明した。しかし同時に、『アルゲマイネ・アウグスブルク新聞』とのある論争において、私のそれまでの研究では、フランスのこれらの思想傾向の内容そのものについてなんらかの判断をくだす力のないことを、率直に認めた。そこで私は、『ライン新聞』の経営者たちが紙面の論調をやわらげれば同紙にくだされた死刑の宣告「*4」を取り消させることができるなどと幻想をいだいていたのをむしろ好機ととらえて、公けの舞台から書齋に退いたのである。

*1 マルクスは、ベルリン大学法学部に一八三六年一〇月に入学、四一年三月に卒業した。

*2 『ライン新聞』は、一八四二年一月、ライン地方の進歩的ブルジョアジーによって創刊された新聞。マルクスは最初からこの企画に参画し、論説を寄稿してきたが、四二年一〇月、その主筆に就任、プロイセンの専制政府を相手に大活躍をした。四三年三月辞任。

*3 これらはすべて、マルクスが『ライン新聞』のために書いた論説や通信の主題。

*4 プロイセン政府による新聞の発行禁止措置のこと。

私を悩ました疑問の解決のために最初にとりかかった仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であって、その序説は、一八四四年にパリで発行された『独仏年誌』[*1]に掲載された。私の研究が到達した結果は次のことだった。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体から理解されるものではなく、またいわゆる人間精神の一般的発展から理解されるものでもなく、むしろ物質的な生活諸関係に根ざしているものであって、これらの生活諸関係の総体をヘーゲルは、一八世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって、「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが、しかもこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。経済学の研究を私はパリで始めたが、ギゾー氏の追放命令「*2」によりブリュッセルに移ったので、そこでさらに研究を続けた。私にとって明らかとなり、そしてひとたび自分のものになったから私の研究にとって導きの糸として役立った一般的結論は、簡単に次のように定式化することができる。

*1 マルクスが一八四四年二月、パリで発刊した雑誌。ここで触れている論文は、「ヘーゲル法哲学批判 序説」。マルクスは、プロイセン政府の言論弾圧の手の及ばないところでこの雑誌を発行するために、一八四三年一〇月にパリに移っていた。雑誌は最初の号(第一号・第二号の合併号)だけで終わった。

*2 ギゾーは当時のフランス政府の実力者（外相だったが、事実上の首班と呼ばれた）。プロイセン政府の圧力を受けて、一八四五年一月、マルクスに追放命令をだした。

「以下4ページ9行目までは、原文では、段落の切れ目のない一続きの文章となっている部分だが、講義の都合上、いくつかの段落に分け、その段落ごとに、(一)、(二)等の番号をつけた。」

(一) 人間は、彼らの生活の社会的な生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係にはいり込む、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいり込む。

(二) これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが現実の土台であり、その上に一つの法的かつ政治的な上部構造がそびえ立ち、その土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的、および精神的生活過程全般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する。

(三) 社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それまでそれらがその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎない所有諸関係と、矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展の諸形態からその桎梏（しっこく）に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。

(四) このような諸変革を考察するにあたっては、経済的な生産諸条件に起きた自然科学的な正確さで確認できる物質的な変革と、人間がこの衝突を意識するようになり、これとたかかって決着をつける場となる、法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、簡単に言えばイデオロギー諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかを判断する場合に、その個人が自分をうぬぼれ描く評価には頼れないのと同様に、このような変革の時期を、その時期の意識をもとに判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、すなわち社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに存在する衝突から、説明しなければならない。

(五) 一つの社会構成体は、すべての生産諸力があるなかではもう発展の余地がないほどに発展しきらないうちは、けっして没落することはなく、また、新しいさらに高度の生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化（ふか）しきらないうちは、けっして古いものに取って代わることはない。それだから、人間はつねに、みずからが解決できる課題だけをみずから提起する。というのは、やや立ち入ってみるとつねにわか

ることだが、課題そのものが生まれるのは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくともそれらが生じつつあることが把握される場合だけだからである。

(六) 大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョアの生産様式が、経済的社会構成体の進歩していく諸時期として特徴づけられよう。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対を解決するための物質的諸条件をもつくりだす。それゆえ、この社会構成体をもって人類社会の前史は、終わりを告げる。

フリードリヒ・エンゲルスと私は、経済的諸カテゴリーを批判した彼の天才的概説「*1」が(『独仏年誌』に)現われて以来、絶えず手紙で思想の交流を行ってきたが、彼は別の道筋を経て(彼の『イギリスにおける労働者階級の状態』を参照)、私と同じ結論に到達していた。そして一八四五年の春、彼もまたブリュッセルに定住したときに、われわれは、ドイツ哲学のイデオロギー的諸見解にたいするわれわれの対抗見解を共同してつくりあげること、実際には、われわれの以前の哲学的意識を清算することを決意した。この計画はヘーゲル以後の哲学の批判というかたちで実行された。分厚な八つ折判二冊の原稿「*2」がヴェストファーレンにある出版所に届いてからかなりあとになって、われわれは、事情が変わったので出版できないという知らせを受け取った。われわれはすでに自分たちみずからが問題を理解するという主な目的を達していたので、それだけに気前よく原稿を鼠どもがかじって批判するままにさせた。当時われわれがあれこれの方面でわれわれの見解を世に問うた違った分野の仕事のなかから、私はここでは、エンゲルスと私が共同で執筆した『共産党宣言』と、私が公表した『自由貿易論』とだけをあげるにとどめる。われわれの見解の決定的な諸論点は、ブルードンに反対して一八四七年に刊行した私の著書『哲学の貧困』のなかで、単に論争のかたちではあつたが、はじめて科学的に示された。「賃労働」についてドイツ語で書かれた一論文「*3」は、私がこの題目についてブリュッセルのドイツ人労働者協会で行なった講演をまとめたものであるが、二月革命と、その結果私がベルギーから強制的に退去させられたことによつて、その印刷は中断されてしまった。

*1 論文「国民経済学批判大綱」。

*2 『ドイツ・イデオロギー』のこと。

*3 「賃労働と資本」のこと。一八四七年二月、ブリュッセルで行なった講演を、

マルクスは整理して出版しようとしていた事情が読み取れる。その後、一八四九年

四月に『新ライン新聞』紙上に連載された。

一八四八年と一八四九年の『新ライン新聞』[*1]の発行と、その後起こったさまざまな事件のために、私の経済学研究は中断させられたが、ようやく一八五〇年になってロンドンで私はふたたび経済学研究にとりかかることができた。大英博物館には経済学の歴史にかんする膨大な資料が積みあげられているし、ロンドンはブルジョア社会の観察には好都合な位置にあるし、最後にカリフォルニアおよびオーストラリアの金の発見とともにブルジョア社会は新たな発展段階にはいり込むように見えたので、私はもう一度まったくはじめからやり直して、新しい資料によって批判的に研究し尽くそうと決意した。この研究では、いくぶんかは一見まったく関係のないような諸学科にまでおのずから踏み込むことになり、私はこれらの学科に多かれ少なかれ時間をつぶさなければならなかった。しかし、私の自由になる時間は、とりわけ生活費を稼ぐためにいやおうなく働かねばならぬという必要によって縮められた。英米に読者をもつ一流新聞『ニューヨーク（・デイリー）・トリビューン』[*2]に私はすでに八年間寄稿しているが、この寄稿は、本来の新聞通信には例外としてたずさわるだけだったので、研究のはなはだしい分散を余儀なくされた。とはいえ、私の寄稿のうち非常に重要な部分は、イギリスと大陸で起きた顕著な経済的諸事件にかんする論説であったので、私は、経済学という本来の科学の領域外にある実際上の細目にも精通することになった。

*1 一八四八年三月、ドイツに革命が起った時、マルクス、エンゲルスはドイツに帰国して、ライン地方のケルンで革命的民主主義の機関紙『新ライン新聞』を発行した。この新聞は四八年六月一日に創刊第一号を発行し、反革命の強圧の中で、四九年五月一九日を以て終刊とした。

*2 アメリカの日刊紙。マルクスは、五一年八月から六二年三月まで、この新聞に寄稿した。これには、エンゲルスも協力し、彼がマルクスに代わって執筆した論説は相当数に上っている。

経済学の分野における私の研究の歩みについてこのように概略を述べることによって、私の見解がどのように評価されようとも、そしてまた、それが支配階級の利己的な偏見とどれほど一致しないとしても、せめてもそれが長年にわたる良心的な研究の成果であることは示されるはずである。しかし科学の入口には、地獄の入口と同じように、次の要求が掲げられなければならない。

ここに一切の恐怖は捨てられねばならぬ

ここに一切の卑怯（ひきょう）は死なねばならぬ。

一八五九年一月、ロンドンにて

カール・マルクス